

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業

令和5年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：よりよいスマート WE を目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ

実施機関：京都大学

研究代表者氏名：出口康夫

1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 第1回シンポジウム書籍化・公開講義の配信	←											→
2 比較 WE 学：ワークショップ開催										←		→
3 人的交流グループ：小田急沿線フィールドワーク	←											→

2. 業務実績の説明

① 第1回シンポジウム書籍化・公開講義の配信

第1回公開シンポジウム「より良いスマート WE を目指して」（大阪大学 学術知共創プログラム 共催）の書籍化を進め、『AI 親友論』（徳間書店）を出版した。

また、YouTube 公開講義「立ち止まって、考える」シリーズにおいて、研究代表者出口康夫「WE ターンから AI 親友論へ」（全 3 回）・分担者大西琢朗「ビジネスを哲学する／哲学をビジネスする」（全 2 回）の配信を行うことで、社会発信を行った。

② 比較 WE 学：ワークショップ開催

比較 WE 学グループでは、東アジアなど非西洋の思想伝統に根差した人間観・社会観を比較思想研究のアプローチにより析出し、そうしたアジア的価値観に基づき、現代社会の WE 問題に対する解決策を提案しようとしている。2023 年度は以下のような活動を行った。

- ワークショップ"We's discussion on Self-as-We: The Advocate meets the Critics"（2023 年 6 月 28 日）では、マサチューセッツ大学ボストン校の Yumiko Inukai 教授をモデレーターとして迎え、出口プロジェクトリーダーの提唱する「Self-as-We」の概念を参加者とともに批判的に検討した。活発な質疑応答の結果、マルチ・エージェント・システムの概念の精緻化が Self-as-We の議論のカギとなることが示唆された。
- 昨年度から継続して行われている「ヒュームと WE 研究会」の第 3 回（2023 年 9 月 29 日）では、ヒュームの「真の懐疑主義（true scepticism）」という立場が「根源的できなさ」の観点から検討され、真理の探究における「不可能性の自覚」がヒュームの哲学において持つ意味が議論された。
- タリン大学の Rein Raud 教授を迎えて開催された"Workshop on the world philosophy"（2024 年 1 月 13 日）では、関係的存在論（relational ontology）、道元とマルクス・ガブリエル、吉藏における沈黙、ナラティブ・エシックスとアニミズムなど、非西洋の様々な思想伝統に関する発表が行われた。会場には Jay Garfield 教授や Graham Priest 教授をはじめとする多くの方々

の参加を得て、活発な議論が行われた。

- ワークショップ"WE-Issue and its social implication" (2024年2月4日)では台湾、オーストラリア、そして国内から研究者を迎え、自己の身体行為者性と幸福のあり方、心的状態による時間空間経験の変化と自己把握、精神的成長の記述と心理的空間表象の関係、AI・人間共生社会へのパス記号論的アプローチ、仏教における無我および業の概念と道徳的責任の問題、そして荘子における自己同一性と死の問題といった、「自己 (self)」の問題系に属する多様なトピックに関する発表がなされ、東アジア的な自己観をめぐる議論が深められた。
- カリフォルニア大学バークリー校の Robert Sharf 教授を迎えて行われたワークショップ "Buddhism meets Philosophy" (2024年3月21日)では、出口プロジェクトリーダーを含む3名の発表者から、原典の緻密な分析に基づきつつ仏教思想の様々な側面に新たな光を当てる視点が提示され、相互に有意義なディスカッションが行われた。

こうした活動の蓄積により、比較 WE 学グループ内だけでなくプロジェクトメンバー全体での Self-as-We に関する理解が深まり、さまざまな社会的・文化的・宗教的背景のもとでの「WE」の考え方を比較し議論する論文集の出版に向けた準備が進展した。

③ 人的交流グループ：

本グループでは、交通流のスマート化に伴い、「行きずりの人間関係(モバイル WE)」が貧困化する危険があるのではないかという問題意識のもと、実証実験を通じて ICT ツールによるモバイル WE 再構築と活性化の可能性を模索している。2024年度は以下の取り組みを行った。

- 小田急電鉄・小田急不動産との協力関係を確立し、小田急栗平駅のコミュニティカフェスペース Cafe&Space L.D.K.を実証実験のフィールドと決定した。
- 実験に使用する ICT ツールとして、同カフェにサイネージを設置し、SNS を通じた電子掲示板として利用することを決定した。
- 実証実験に用いる指標について検討し、既存の「Self-as-We 尺度」を今回の実験目的・環境に合わせ改変し、モバイル WE 活性化の尺度として使用することを決定した。
- サイネージの設置に先立ち、同カフェ店内および周辺(川崎市麻生区)における「Self-as-We 度合」の現状を把握するために、予備実験(アンケート調査)を行った。(2024年1月)
- 予備実験を踏まえたサイネージの設置、さらに今後の実験について検討を行った。

④ 合意形成グループ：

1. 越前市におけるフィールド実証実験

昨年度に行った調査体制整備に基づき、当初の予定であった越前市商工会議所から、教育機関および自治振興会に調査対象野変更を行った。その上で7月から8月にかけて、パイロット的な調査を市内の二つの高校において行った。

このパイロット調査により、本調査実施に向けて解決すべき課題がいくつか見いだされたため、協力関係にある越前市役所の担当者との協議の上、自治振興会を対象とした調査を6年度前半の開始に変更した。

2. 合意形成ツールの開発

1での実証実験で合意形成についても実験が行えるように、ツールの開発を行った。ただし、上で述べた解決すべき課題として、このツールの検証の必要性が生じたため、12月から研究室実験を行った。

⑤ e-ひとグループ：

1. e-ひとの関連文献の調査と文献リストの作成

e-ひと（ロボット、AI、デジタルツイン、アバターなどあたかもパーソナリティを有しているかのようなパタンをもった振る舞いをするもの）に関連した文献の収集・調査を継続して実施した。

2. e-ひと研究会（定例会）

1での文献調査と並行して e-ひとに関する研究会を4回実施した（10/30,11/30,12/18,2/27）。e-ひとの定義の検討や e-ひと実装にあたっての具体的な問題点の洗い出し等、哲学的・工学的議論を行った。

【研究成果の発表状況等】（責任機関（研究代表者）のみ記載）

○論文 （計 15 件） うち査読付論文 6 件、うち国際論文 計 2 件、うちオープンアクセス 計 1 件

1. 「Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者(上)」,『思想』,岩波書店, vol.1189, pp.65-85, 2023.05.
2. 「Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者(中)」,『思想』, pp.143-162, 岩波書店, vol.1191, 2023.07
3. Self-as-Anything: 道元における自己と世界と他者,(下),『思想』,岩波書店, vol.1193, pp.70-92, 2023.09
4. Garfield, J., “Can’t Find the Time: Temporality in Madhyamaka,” *Philosophy East and West* 73:4, pp. 877-897. (2023), **Peer-reviewed**,
5. Kato, T., “Wealth Redistribution and Mutual Aid: Comparison using Equivalent/Nonequivalent Exchange Models of Econophysics,” *arXiv*, 2022.12.31, No peer review, <https://doi.org/10.3390/e25020224>
6. Kato, T., “Wealth Redistribution and Mutual Aid: Comparison using Equivalent/Nonequivalent Exchange Models of Econophysics,” *Entropy*, vol.25, 224, 2023.01.24, **Peer-reviewed**, <https://doi.org/10.3390/e25020224>
7. 加藤猛、「非暴力コミュニケーションのメディエーションに向けた生成 AI の試行」、京都大学学術情報リポジトリ、2023、査読無、<http://hdl.handle.net/2433/284630>
8. Kato, T., “Generative AI trial for nonviolent communication mediation,” *arXiv*, 2023.08.07, No peer review, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2308.03326>
9. 加藤猛、「WE エコノミー：道徳的責任とリスク脆弱性に基づく相互扶助分配のポテンシャル」、京都大学学術情報リポジトリ、2023、査読無、<http://hdl.handle.net/2433/286300>
10. Kato, T., “WE economy: Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability,” *arXiv*, 2023.12.12, No peer review, <https://doi.org/10.48550/arXiv.2312.06927>
11. Kato, T., “WE economy: Potential of mutual aid distribution based on moral responsibility and risk vulnerability,” *PLoS ONE*, Coming soon, **Peer-reviewed**, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0301928>
12. 護山真也、「普遍的思想史の夢の続きへ——仏教論理学研究の視点から——」,『比較思想研究』50号, 頁未定, 2024年3月, **査読有**, WEB 非公開
13. Taguchi, S., Ur-Ich, as a Concept in Phenomenology、*Encyclopedia of Phenomenology*、Springer、（巻号なし）、pp.1-9、2024.2.21、**査読有り**、https://link.springer.com/referenceworkentry/10.1007/978-3-030-47253-5_413-2
14. Taguchi, S., How to Become Conscious of Consciousness: A Mediation-Focused Approach、*Varieties of Self-Awareness: Contributions to Phenomenology*、121、pp.193-211、2023.9.20、査読なし、https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-3-031-39175-0_11
15. Tsu, Peter Shiu-Hwa and Sugimoto, Shunsuke “On Being Conscious as a Basic Liberty”, *AJOB Neuroscience*, Taylor&Francis Online, 15:1: 24-26. 11 January 2024, **peer reviewed**, <https://doi.org/10.1080/21507740.2023.2292489>

○講演 （52 件） うち招待講演 8 件、うち国際学会 計 21 件

1. 出口康夫「「ひと」と「e-ひと（e-person）」とのあるべき関係を考える」,応用哲学会第 15 回年次研究大会,金沢大学, 2023.04.23.
2. 出口康夫‘WE-turn and Smartization of Community’,第 23 回国際技術哲学会,国立オリンピック記念青少年総合センター, 2023.6.8.
3. 出口康夫 From WE turn to an Alternative Relationship between Humans and Artificial Persons, **invited talk**, 17th CLMPST, University of Buenos Aires, 2023.7.24.
4. 出口康夫 WE-turn: An Engaging Humanities for the Contemporary Society, 2023.8.24 General Assembly of the International Council for Philosophy and Human Sciences (CIPSH), Humanities in

the Global and Digital Age: The role of Humanities research traditions and interactions in contemporary society, Keynote speech, (Keio University, Tokyo)

5. 出口康夫 We-turns: A Way of World Philosophy, 日中哲学会「世界哲学において東アジアが果たす役割」, 東北大学, 2023.9.11.
6. 出口康夫 From Incapability to We-turn, 2023.9.17, Collectivity and Individuality: Philosophical Appreciation, Tallinn University
7. 神崎宣次、朝康博、福井県越前市の二つの高校における合意形成実験の実施報告、人工知能学会 市民共創知研究会 第 11 回研究会、なごのキャンパス、名古屋市、2023. 10. 15.
8. 出口康夫 What is a Good Relationship between Humans and AI?, EHESS ×Kyoto Mini Seminar 2023, 2023 10.19, Kyoto University,
9. 出口康夫「スマート WE」DX 時代の哲学：I から WE へ、2023. 10.29, 国際 P2M 学会基調講演
10. 出口康夫 We-Turn of Freedom and Its Political Consequences, 2023.12.10, CCPEA Keynote Talk, 京都大学
11. 出口康夫 基調講演「人〈わたし〉と人格をもった AI〈e-ひと〉が共生する〈WE〉社会へ」, 第 6 回日立京大ラボ・京都大学シンポジウム, 2024.01.22. 東京コンベンションホール
12. 出口康夫「WE ターンから AI 親友論へ」, 2024.1.24 中部大学講演
13. 出口康夫 “We-Turn and Its Social Implications”, 2024.02.04. A World-based View of Personal Identity in the Zhuangzi, JSPS・CAPE 共催, 京都大学
14. 出口康夫 WE-turn and Its Implications, 2024.2.13, 日独学術コロキウム, Hamburg University
15. 出口康夫「共冒険者としての AI」, 2024.2.16, 2023 年度全国公正研究推進会議, ビデオ講演
16. 出口康夫 “Dogen on Time”, Buddhism meets Philosophy, JSPS・CAPE 共催, 2024.03.21, 京都大学
17. Garfield, J., “Falling Hairs and Crumbling Foundations: What Tibetan Madhyamaka Can Contribute to Contemporary Epistemology,” Root Lecture, Washington and Lee University, March 2024, Philosophy Colloquium, Villanova University, April 2024.
18. Garfield, J., “Buddhist Conceptions of the Self and the Person,” conference on the self, Washington and Lee University, March 2024. “You Didn’t Build That! Thinking About Technology in the Plural,” Kyoto Institute of Philosophy Inaugural Address, January 2024.
19. Garfield, J., “Both Sides Now: Pointing to the Natureless Nature of Things,” Hobart and William Smith College, November 2023.
20. Garfield, J., “Groundlessness,” Mind and Life Europe lecture series on Embodied Mind (remote), November 2023.
21. Garfield, J., “Emptiness, Interdependence, Identity, and Ethics: Sentience in the Anthropocene,” Mind and Life Europe European Summer Research Institute, Pomaia, August 2023
22. Garfield, J., “How Many Hairs are Falling? Pramāṇa for Mādhyamikas,” University of Wisconsin Conference on the work of Tom Tillemans, May 2023 “The Epistemic Role of the Emotions,” Yale University conference on Emotions in Buddhist Philosophy, May 2023
23. Garfield, J., “Māyā, Mokṣa, and Minds: KC Bhattacharyya and Freedom and Subjectivity,” St. Olaf College Belgium Lectures, April 2023, Monash University Department of Philosophy colloquium, June 2023..
24. Discussant, “The Future of Madhyamaka,” Yale University symposium, March 2023
25. Garfield, J., “Increasing Inclusivity in Philosophy: Let’s Get the Job Done,” Amherst College Departments of Religion and Philosophy, February 2023
26. Garfield, J., “Nature and Norms: A Humean Account of the Sources of Normativity,” University of South Carolina Philosophy Colloquium, February 2023, Kyoto University Philosophy Department Colloquium, March 2023.
27. 猪原健弘, 意思決定主体および実現可能な状態の増減に関するパレート効率性の保存についての数理的分析, 第 30 回社会情報システム学シンポジウム, 一般セッションプログラム, セッション 2: 社会システムと IT/IoT, 2-4. 電気通信大学 UEC アライアンスセンター 100 周年記念

ホール, 2024 年 2 月 9 日 (金) . (<http://sig-iss.work/> [最終閲覧日 : 2024.4.15])

28. 神崎宣次・朝康博、福井県越前市の二つの高校における合意形成実験の実施報告、人工知能学会 市民共創知研究会 第 11 回研究会「みらいらば なごや 2023」、2023.10.15、なごのキャンパス
29. Murakami, Y Science Communication of Informatics and ethics of data science integrated with education of sustainable development. 4S 2023, Honolulu International Convention Center
30. 三谷尚澄、「いま（さら）倫理学（なんか）に何ができる（というの）か？ 『下級哲学』の社会的機能をめぐるいくつかの考察」、関西倫理学会 2023 年度大会シンポジウム「ELSI と倫理学」提題発表、2023 年 10 月 29 日、龍谷大学〔単独／招待講演〕
31. 大西琢朗、「ブランダムのオウムー：推論主義概説」、GRP 研究会、2023.6.12、オンライン
32. Onishi, T. Logic of Agent: Exploring Interactions between Human and Artificial Agents, EHESS-Kyoto Seminar, 2024.2.19, EHESS, Paris, France.
33. 佐藤将之、中国古代の諸子百家思想における自己と人間関係認識、京都大學文學院：「“Toward a Better WE” Workshop」, 2023.2.22、京都大學
34. Sugimoto, Shunsuke, “A Realist Answer to “Why Be Moral?””, Asian Metaethics Workshop, March 22, 2024, Keio University.
35. 杉本俊介「懷徳堂から学ぶ日本の徳倫理学——中井竹山の利に注目して」、ワークショップ「日本における徳の諸相」、2024 年 3 月 14 日、慶應義塾大学。
36. Sugimoto, Shunsuke, “Do Moral Requirements Provide Reasons? A Novel answer from Modified Second-Person Standpoint”, Taiwan Philosophical Association (TPA), December 9, 2023, National Sun Yat-sen University.
37. 杉本俊介「徳に基づく規範理由の分析」、日本哲学会第 3 回秋季大会、2023 年 11 月 26 日、オンライン。
38. 杉本俊介「内部告発の倫理について、これまで考えてきたことと、最近考えていること」、研究会「内部告発の倫理の諸側面：工学倫理とビジネス倫理の接点その 1」、2023 年 9 月 1 日、METRO MINUTES 新大阪レンタル会議室。
39. Sugimoto, Shunsuke, "Meaning in Life and Objective Theory of Well-being", Fifth International Conference on Philosophy and Meaning in Life (ICPML), June 30, 2023, Tohoku University.
40. 杉本俊介「倫理学からの『20 年後の「あと 4 年で解ける情報倫理の問題」』に対するコメント」、土屋俊先生招待講演「20 年後の『あと 4 年で解ける情報倫理の問題』」、電子情報通信学会 SITE/情報処理学会 EIP 研究会、2023 年 6 月 12 日、立正大学。(招待あり)
41. 杉本俊介「悪徳企業の株を売るべきか——株式売却のパズルから「よりよくお金を使う」を考える」、日本経営倫理学会 ESG 投資・SDGs 研究部会、2023 年 4 月 20 日、オンライン。
42. Tatsumi, T and Murakami, Y, Ethical Dilemma Judgment Education and Generative AI for Preparing Students for the Digital Age: A New Approach to Computer Ethics Education in Japan OCCE 2024, Bournemouth University, February 28, 2028.
43. 田口 茂、自他の重ね合わせと相互媒介——哲学×AI の融合研究、北海道大学電子科学研究所×日立北大ラボ 新領域探索シンポジウム (招待講演)、2024.3.21、北海道大学
44. Taguchi, S 、 From Relation to Mediation: The Potential of ‘Disconnecting Connection’ in Husserl and Hajime Tanabe, RELATION IN PHENOMENOLOGY, PHENOMENOLOGY IN RELATION: Intra- and Interdisciplinary Perspectives (ポーランド現象学会基調講演)、2023.12.2、オンライン
45. Taguchi, S 、 Intentionality as Disconnecting Connection: An Application of Hajime Tanabe’s Concept of Mediation in Phenomenology, International Conference: Intentionality and Phenomenality, 2023.11.24、Chinese University of Hong Kong.
46. Taguchi, S 、 What is ‘Ur-Ich’ in Husserl? An inquiry into the self prior to the one/many dichotomy, CFS lecture (招待講演)、2023.9.7、University of Copenhagen
47. 田口 茂、人工主体とのインタラクションと生命の「脆さ」——AI と共生する未来に向けて、第 8 回全脳アーキテクチャ・シンポジウム (招待講演)、2023.8.1、オンライン
48. Taguchi, S 、 Interaction with artificial agents and the possibility of life-like AI, Cross Roads #40 (招待講演)、2023.7.18、オンライン
49. 田口 茂、人工主体とのインタラクションと「脆さ」の意義——現象学とエナクティヴィズムの視点から、第 37 回人工知能学会全国大会 (招待講演)、2023.6.6、オンライン
50. Taguchi, S, Husserl and Tanabe on mediated subjectivity and community, Husserl's Ethics and Social

- Philosophy in Context. The Kaizo Articles Centenary Conference (招待講演)、2023.5.4、岡山大学
51. 浦東聡介, 日出恵輔, 吉川厚, 大庭弘継, 村上祐子、YouTube コメントに見る裁判官への市民期待の分析. 第3回計算社会科学大会、大阪大学中ノ島センター 2024年2月20日
 52. 渡邊一弘、「根源的できなさ」から「気分次第の探究」へ、第3回「ヒュームとWE」研究会 (日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 学術知共創プログラム「よりよいスマート WE を目指して」 Smart WE プロジェクト)、2023. 9. 29、オンライン開催

○本事業で主催したシンポジウム等 (計6件) うち国際研究集会 計4件

1. We's Discussion on Self-as-We: The Advocate meets the Critics, Kyoto Univ. and Zoom, 参加者??, 2023. 6. 28.
2. 第3回「ヒュームとWE」研究会、Zoom 開催、参加者約10名、2023. 9. 29
3. 第6回日立京大ラボ・京都大学シンポジウム「人とAIの〈WE〉社会—AIが人格や道徳をもったら—」、東京コンベンションホール (オンライン同時開催)、2024. 1. 22
4. Rein Raud 教授講演会 “Workshop on the World Philosophy”、京都大学文学研究科、2024.1.13.
5. International Workshop “WE-Issue and Its Social Implications”、京都大学文学研究科、2024.2.4.
6. Robert Sharf 教授招聘ワークショップ “Buddhism meets Philosophy”、京都大学文学研究科、2024.3.21.

○社会発信 (9件) ※新聞・TV 報道を含む

1. 出口康夫、「WE ターンから AI 親友論へ 第1回～第3回」、京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える」、2024.02.22,23,27
2. 大西琢朗、「ビジネスを哲学する／哲学をビジネスする」、京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える」、2024.2.17, 24, オンライン
3. 猪原健弘, 合意形成: 再入門, CELM BELIEF, Vol.36, pp.18-19, 2023 (https://www.celm.co.jp/celmbelief_numbers/vol36/)
4. 杉本俊介「ELSI (エルシー) 視点で考える ChatGPT—生成 AI と倫理」、『旬刊 経理情報』2/1号「いまこそ知りたい! ビジネス倫理」(第2回) 39頁、中央経済社、2024年2月1日、64頁。
5. 杉本俊介「倫理はリンリンリうるさいものか?—ビジネス倫理とは何か」、『旬刊 経理情報』1/1号「いまこそ知りたい! ビジネス倫理」(第1回) 31頁、中央経済社、2024年1月1日、64頁。
6. 杉本俊介「インテグリティと徳」、BERC (経営倫理実践研究センター) 経営倫理の啓発・教育・研修コンソーシアム、2023年11月16日、オンライン。
7. 杉本俊介「【書評】表出主義から見た非認識説批判と認識説擁護—井上達夫『規範と法命題』の批判的検討」、『法と哲学』、第9号、2023年6月30日、303-311頁、招待あり、WEB 非公開。
8. 時任宣博、佐伯啓思、諸富徹、長岡慎介、出口康夫、朝康博、兼松佳宏、鈴木教洋、「創造的市民による社会づくりと Wellbeing の実現」、第5回日立京大ラボ・京都大学シンポジウム、2023.01.26、上野イーストタワー
9. 時任宣博、出口康夫、稲谷龍彦、松村忠幸、渡邊淳司、水野弘之、西澤格、「人とAIの〈WE〉社会—AIが人格や道徳をもったら—」、第6回日立京大ラボ・京都大学シンポジウム、2024.01.22、東京コンベンションホール

○著作物 (計7件)

1. 出口康夫、『京大哲学講義 AI 親友論』,徳間書店,2023.7
2. Yasuo Deguchi(共著),*META-SCIENCE – TOWARDS A SCIENCE OF MEANING AND COMPLEX SOLUTIONS*, eds Andrey Zwitter & Takuo Dome ‘FROM INCAPABILITY TO WE-TURN’pp.41-70, University of Groningen Press, 2023.11.30
3. Garfield, J “Moral Responsiveness in Buddhist Philosophy: Buddhist Ethics and the Transformation of Experience,” in Robbiano, C. and S. Flavel, eds., *Key Concepts in World Philosophies: Everything You Need to Know about Doing Cross-Cultural Philosophy*. Bloomsbury. (2023), pp. 247-256.

4. Garfield, J “Madhyamaka, Ultimate Reality, and Ineffability” (with Graham Priest), in C Coseru (ed.), *Reasons and Empty Persons: Mind, Metaphysics, and Morality: Essays in Honor of Mark Siderits*. New York: Springer, pp. 247-259. (2023)
5. Garfield, J “Between Abhinavagupta and Daya Krishna: Krishnachandra Bhattacharyya on the Problem of Other Minds,” (with Nalini Bhushan), in E. Coquereau and D. Raveh, eds., *The Making of Contemporary Indian Philosophy: Krishnachandra Bhattacharyya*. London: Routledge, (2023), pp. 137-148.
6. 猪原健弘, 入門 GMCR, 勁草書房, 288 pp., 2023 年 8 月.
7. 杉本俊介「人生の意味と幸福」、森岡正博・蔵田伸雄（編）『人生の意味の哲学入門』（第五章）103-125 頁、春秋社、2023 年 12 月 20 日、303 頁。

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 令和5年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：よりよいスマートWEを目指して:東アジア人文社会知から価値多層社会へ

実施機関：慶應義塾大学

研究代表者又は分担者氏名：杉本 俊介

1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① e-ひとの関連文献の調査と文献リストの作成	←											→
② e-ひと研究会（定例会）							←					→
③												

2. 業務実績の説明

① e-ひとの関連文献の調査と文献リストの作成

e-ひと（ロボット、AI、デジタルツイン、アバターなどあたかもパーソナリティを有しているかのようなパターンをもった振る舞いをするもの）に関連した文献の収集・調査を継続して実施した。

② e-ひと研究会（定例会）

①での文献調査と並行してe-ひとに関する研究会を4回実施した（10/30,11/30,12/18,2/27）。e-ひとの定義の検討やe-ひと実装にあたっての具体的な問題点の洗い出し等、哲学的・工学的議論を行った。

【研究成果の発表状況等】（責任機関（研究代表者）のみ記載）

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 令和5年度 委託業務実績報告書

プログラム名：学術知共創プログラム

研究テーマ名：よりよいスマートWEを目指して:東アジア人文社会知から価値多層社会へ

実施機関：南山大学

研究代表者又は分担者氏名：神崎 宣次

1. 業務の実施日程

研究項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 越前市におけるフィールド実証実験				←→								
② 合意形成ツールの開発	←→								←→			

2. 業務実績の説明

① 越前市におけるフィールド実証実験

昨年度に行った調査体制整備に基づき、当初の予定であった越前市商工会議所から、教育機関および自治振興会に調査対象野変更を行った。その上で7月から8月にかけて、パイロット的な調査を市内の二つの高校において行った。

このパイロット調査により、本調査実施に向けて解決すべき課題がいくつか見いだされたため、協力関係にある越前市役所の担当者との協議の上、自治振興会を対象とした調査を6年度前半の開始に変更した。

② 合意形成ツールの開発

①での実証実験で合意形成についても実験が行えるように、ツールの開発を行った。ただし、上で述べた解決すべき課題として、このツールの検証の必要性が生じたため、12月から研究室実験を行った。

【研究成果の発表状況等】（責任機関（研究代表者）のみ記載）